

漫才・コントにおける世代間の特徴の違い

鳩貝 裕乃

2019年現在、日本のお笑いにおいて「お笑い第七世代」という言葉がキーワードとなっている。「お笑い第七世代」と呼ばれるお笑い芸人は、デジタルネイティブ世代に当たるとされ、新しい時代のアイテムや考え方が、これまでにないお笑い像を形成していると考えられる。本研究では、日本のお笑い芸人の漫才とコントについて、ネタの内容に世代区分の特徴があると仮定し、ネタ中に笑いが発生した部分である「笑いポイント」の分析を行いどのような変化が見られるのか検証することを目的とする。

本研究ではおおよそその芸歴が13年～23年に当たる芸人を「お笑い第六世代」、芸歴が3年～11年に当たる芸人を「お笑い第七世代」と定め、これに該当するとされるお笑いコンビの漫才とコントを分析する。初めに、各世代に当てはまる漫才師・コント師をそれぞれ10組ずつ選出する。次に、3～5分程度の長さのネタ動画を各組1, 2本選出する。それらのネタ動画中の台詞を書き起こし、漫才・コントそれぞれについて調査項目を設定し、世代間の特徴の違いを分析する。

第六世代と第七世代の漫才は、以下の特徴の違いがあった。一分間辺りの笑いポイントの頻度平均は第六世代が約7.5回、第七世代が約5.2回であった。笑いポイントの間隔は、第六世代では77%が次の笑いまでの間隔を10秒以内に収めていたが、第七世代では57%であった。各笑いポイントの笑いの主体がボケかツッコミのどちらであるかについて、第六世代はボケによる笑いが58.4%、反対に第七世代はツッコミによる笑いが70.8%を占めていた。一ネタ中のボケ・ツッコミの種類をグループ別に割合で表しt検定を行ったところ、ツッコミ5グループ中「否定」「補足・共感」に有意差が見られ、ボケ3グループ中「共感・共有」「論理的逸脱」に有意傾向が見られた。さらに、各ボケ・ツッコミの種類について、笑いポイントとなった確率を算出し独立性の検定を行ったところ、ボケ18種中7種、ツッコミ13種中5種において、笑いポイントのなりやすさと世代の間に関係性があると言えることが判明した。

以上を踏まえ、第七世代の漫才は第六世代の漫才と比較し、①一ネタ中の笑いポイントの数が少ない、②次の笑いポイントまでより長い時間を取る、③ボケよりもツッコミを主体に笑いを取る、④「論理的逸脱」ボケと「補足・共感」ツッコミを積極的に使用する、⑤「共感・共有」ボケに含まれる「リアル」「かぶせ」「人身攻撃」は、笑いを起こす手段として使用される回数が少ない、⑥「補足・共感」ツッコミに含まれる「状況説明」は笑いを起こす手段として使用される回数が多いという傾向にあることが言える。

(指導教員 真栄城哲也)